



Title	『哲学探究』はどの程度パッチワークであるか：研究プログラムの提起
Author(s)	奥, 雅博
Citation	年報人間科学. 1996, 17, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4338">https://doi.org/10.18910/4338</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『哲学探究』はどの程度パッチワークであるか

——研究プログラムの提起——

奥 雅 博

## 〈要旨〉

ウィトゲンシュタインの『哲学探究』は難解な書物である。個々の覚え書きは明快だが、一連の考察、さらには書物全体の主旨を把握しようとすると困難である。この難点は、主としてこの書物の成立と構成に由来する、と私は考える。この書物は積年の考察の沈澱物に他ならず、その結果時に古い覚え書きが無修正で利用され、覚え書きが別の文脈に挿入され、キャッチフレーズがそれだけで移動されたりしているのである。それ故、解釈の為の一つの良い戦術は、より以前のヴァージョンに戻って読むことにある、と考える。このことを、四つの有名な箇所、即ち、三五四、二五八、五八〇、二〇一の各節について試みた。

## キーワード

ウィトゲンシュタイン、『哲学探究』、遺稿、文献学、パッチワーク

言語は様々な道の織りなす迷宮である。君が一方からやってくると思手はわかる。しかし別な方向からくると同じ場所に来ていても、もはや思手がわからない。『哲学探究』

## 二〇三節

## パロディ

『哲学探究』は様々な覚え書きの織りなす迷宮である。君が一つの流れて読んでいくと思手がわかる。しかし別な流れて読んでいくと同じ論点に来ていても、もはや思手がわからない。

## 一 『哲学探究』は何故難解なのか。

『哲学探究』が後期ウイトゲンシュタインの思索の集大成であること、これは誰も否定の出来ない事実である。現在公刊されている書物に採用されている一九四五年一月付けの序文が述べるように、それは一九二九年に再び哲学に従事して以来の永年にわたる思索の沈澱物である。ウイトゲンシュタインがこの原稿を一冊の書物として完成させようと試みたことは確かである。その確認のためにはそれ以外の遺稿と比較してみるが良い。即ち、そこに見いだされる覚え書きは推敲を経たものであり、とりあえずのメモではない。そのことは、同じ分量の原稿にどれだけの情報が含まれているかを、比較してみれば、明らかになるであろう。また、そこに論じられてい

る主題も、「意味、理解、命題ないし文、論理等の諸概念、数学の基礎、意識状態、等々」の多岐にわたっているのである。それ故、後期ウイトゲンシュタインの思索を概観するにあたってまず一番に挙げられるべき書物であること、このことには疑いはない。

他方、この書物の草稿は幾度もの手直しを経たものの、生前に完成することはなかった。それ故、この書物は、一つの主題をめぐって一気呵成に書き上げられた著書とは正反対の性格を示している。即ち、本人が認めるようにまさに覚え書きの「アルバム」なのである。

『哲学探究』の難解さは独特なもので、ハイデッガー、アドルノといった人々の難解さとは異なっている。平明な散文で書かれ、一つ一つの覚え書きはそれなりに理解可能である。だが、一連のパラグラフの主張が何であつたかとなると、さらには『探究』全体の主張が何かとなると、極めて困難な問題となる。その結果、大森荘蔵のかつての言をひけば「読者ないし研究者の数ほどウイトゲンシュタインの私家本がある」ことにもなりかねないほどである。

私自身は、このような状況は、次に述べるウイトゲンシュタインの叙述の形式、態度の結果である、と考えている。第一に、第一部でさえ、一六年にわたる思索の沈澱物である。第二に、それは他人のための著作というよりも、なによりもまずウイトゲンシュタイン本人にとっての備忘録である。第三に、ウイトゲンシュタインは自分の書き残しておきたいことをとにかく一書に集めようとした。その結果、(a) ある主張に対する注釈として古い覚え書きから何節

かが挿入される場合、この間の思索の緩慢な変化に対応する表現の修正・限定は施されないままになっている、(b) 古いヴァージョンからその次のヴァージョンに移る折に、カット・アンド・ペーストが施されかなりの移動が施されるものの、これに対する十分なケアはなされないままである、(c) 本人ないし他人を酔わせる殺し文句・キャッチフレーズが一節だけ投入される、といったことになり、『探究』は難解な書物となっているのである。

一例を引いてこのことを説明しよう。以下は「内的過程」「基準」「感覚」について『探究』に見いだされる有名な主張である。要約すると、

内的過程は外的基準を必要とする。(五八〇)

基準と兆候の区別は結局存在する。例えば、気圧計の降下は降雨の兆候であるが、雨滴を眼にしたり、濡れたりすることは降雨の定義的基準である。(三五四)

他人が赤の表象をもつか否かは彼の言動が基準となるが、私がその表象をもつか否かについては基準がない。(三七七)

私は自分の感覚を基準によって同定するのではなく、ただ同じ表現を使用する。(二九〇)

これらの一連の叙述に混乱や不整合の懸念を抱かずに済ませることは極めて困難であろう。全ての主張を「端的に」「字義通りに」採るならば、相対立する多くの解釈の導出が可能と思えるのである。

## 二 従来の読解法。現在可能な方法。

このような状況に対してワイトゲンシュタイン研究者達は、従来、年月をかけて専門家になることによって対処してきた。即ち、彼の草稿を沢山読むこと、それにより彼のスタイルを体得すること、つまり、問合いの取り方、メリハリの付け方を自然と身につけること、その結果、ワイトゲンシュタインの覚え書きに適切なアクセントをつけて読むことが出来るようになることであった。ワイトゲンシュタインの専門家になるのは年季のかかる仕事であり、しかも努力をすれば誰もが報いられるわけではない、という意味で一種の名人芸であったのである。<sup>①</sup>

私は、上述のような従来の状況を、かなりの程度文献学的に改善出来る条件が現在では整った、と考えている。その客観情勢の変化から述べていこう。

ワイトゲンシュタインの未公開の遺稿は、いわゆるコーネルコピーとして市販されているので、これにあたるならば、第一次資料に基づく研究が可能であるが、誰にも勧められるものではない。遺稿のデータベース化を行っているベルゲン・プロジェクトは未完成である。<sup>②</sup>ただ、コーネルコピーを利用した研究書が公開されているのでこれらを一次資料の代わりに用いることが出来る。例えば、既に約二〇年前に公開されたハレットの注釈書、<sup>③</sup>ハッカー達の注釈書、<sup>④</sup>ヒルミの研究書、<sup>⑤</sup>等である。これらに引用された箇所から未公開

資料のテキストを組み立てることはある程度可能である。

第二に、ハッカー達のコメントリーには、ソースリスト、即ち『探究』に収録された覚え書きのルーツ表、が与えられている。また、モーリーの対照表も<sup>⑧</sup>公刊されている。これらのリストはたとえ完璧とはいえなくとも十分有用である。第三に、出版されたウィトゲンシュタインの著作のデータベースが、「パースト・マスタース」の一部として迅速な検索が可能な形で市販されたことである。これにより、未公刊の遺稿とのクロスリファレンス、手作業による見落としの除去、の改善が期待されるのである。

### 三 具体的提案。

『哲学探究』を読んでいてわからなくなったら、より以前のヴァージョンへ戻ってみよう、というのがここでの提案である。この作業により、(a) オルターナティブな覚え書きを読むことにより、覚え書きの誤解を取り除く、(b) 原稿の順序・文脈を入れ換えて考える、(c) 覚え書きにメリハリ・アクセントをつける、等の効果もたらされる。

ところでこのような作業をするためには『哲学探究』の成立史について最低限の予備知識が必要なのは言うまでもない。成立史の研究としてまず第一に挙げるべきものはフォン・ライトの古典的論文『「哲学探究」の起源と組み立て』<sup>⑨</sup>であるがこの論文では煩雑を避けるためこの紹介・要約は割愛し、これを前提した上で話を進

めることとする。<sup>⑩</sup>つまり若干の具体的な問題を取りあげて、私の提案がどれだけ有効であるか、大方の吟味にさらしたいと考える。即ち、三五四節、二五八節、五八〇節、二〇一節が具体的例題である。

#### 四 例題1。基準と兆候の区別。検証原理は後期ウィ

トゲンシュタインでも維持されているか。

『探究』の三五四節はこれまで多くの議論を集めた覚え書きである。即ち、

文法における基準と兆候の間の動揺が、およそ兆候しか存在しないかのような外見を生じさせる。例えば我々は、「気圧計が下がると雨が降ることを経験が教える、しかしまた、経験は、我々が湿りと冷たさのある特定の感じを持つとき、これこれの視覚印象を持つとき、雨が降る、ということをも教える」と言う。そしてこれに賛成する論拠として、これらの感覚印象が我々を欺くことがありうることを引き合いに出す。しかしその感覚印象が我々に雨の欺きを生じるという事実が、定義に基づくことに思いを馳せていないのである。

と述べ、基準と兆候の概念上の区別は堅持される、しかも定義が基準と兆候を区別する、と主張しているからである。しかも直前の三五四節は

命題の検証の方法や可能性に関する問は、「そのことで君は何を言わんとしているのか」という問の特殊な形にすぎない。その

答えはその命題の文法に対する寄与である。

と述べ、中期のいわゆる「検証原理」が今なお健在であるかの感を呈しているからである。

実は、三五三―三五六節はMS 一一五の七二―七四ページの覚え書きをそのルーツとする古い覚え書きであり、三五三節はさらに、MS 一一二の九九ページに更なるルーツをもっている。古い覚え書きが三五二節と三五七節の間にいわば割り注として挿入されているのである。<sup>③</sup>このことはハッカーのソースリストで容易に確認できる。

MS 一一五との対比を表示してみよう。

MS 一一五 七二(1)

『探究』 三五三

(2)

(3)

『断片』 四三八

七三(1)

『探究』 三五五

七四(1)

『探究』 三五五

(2)

『探究』 三五六

そして、これらの覚え書きは七一(5)の

「椅子とは何か」という問と「椅子はどのように見えるか」という問とは相互独立な二つの問ではない。

という主張と七五(1)の

「椅子は、知覚の如何から独立に、存在する」という主張は経験命題なのかそれとも文法の確認なのか。

という指摘に挟まれているのである。

ところでMS 一一五の七二(2)は『探究』三五四節の読みを誤

解の余地のないほど補強してくれる。訳出してみると

雨が降っているかどうかを、人はどのようにして知るか。我々は雨を見るし、雨に触れる。「降雨」という語の意味はこのような経験に即して我々に説明された。これらの経験が、雨が降ることの「基準」である、と私は言おう。「降雨とは何か」と「降雨はどのように見えるか」とは論理的に類縁な問である。―さて、気圧計の突然の下降と豪雨とが常に一致することを経験が教えている。そこで、私は気圧計のそのような下降を豪雨の降雨の「兆候」とみなすだろう。ある現象が降雨の兆候であるか否かは、経験が教える。何が降雨の基準として妥当するかは、約定の問題、我々の規定、定義、である。

この二つのヴァージョンからウィトゲンシュタインの主張を整理すると次のようになるであろう。

(1)「椅子(降雨)とは何か」という問と「椅子(降雨)はどのように見えるか」という問は、互いに独立な無関係な問ではない。より一般的には、我々の認識可能性の如何にかかわらず事実事実は事実だ、と無邪気に主張できない。

(2) 命題が述べる事実には何らかのアクセスが可能でなければならぬ。

(3)「外では雨が降っている」という命題について二種類の可能性がある。(a) 降雨を眼にするし、雨滴に濡れる。(b) 気圧計の降下から降雨を推測する。

(4) (a) と (b) は身分を異にする。気圧計の降下と降雨が経

験的に合致する限り、気圧計を降雨判定の補助手段として利用でき、という意味で(b)は「兆候」を示している、といえる。(a)はこれ以上訴えるべきものもなく、これが意味を与える、という点で「(判定) 基準」といえる。

(5) 基準と兆候が時間の経過とともに交替することがある。

(6) しかしこのことは「基準」が存在しない、という主張の論拠にはならない。「降雨」の基準は、人間の感覚特性に大変化がない限り、人間の科学に大変化がない限り、揺らぐとは思えない。ここで、幻覚の可能性を引き合いに出すのは筋違いである。

さて『探究』三五二節では、「円周率の十進法展開の中に7777という数列は存在するかしないかの何れかであり、これは我々が確認する方法をもつかもたないかと独立である、同様に、我々の確認方法の如何にかかわらず他人は痛みをもつかもたないかの何れかである」という議論が取り上げられており、三五七―三五九節では「犬が私語するか否かは、犬が思念するか否かにかかっているのではないか、機械は考えるか、痛みをもつか」という問題が取り上げられている。即ち、MS一一五の場合と同様な、「我々の認識可能性の如何にかかわらず事実として成り立っている」という形のある種の実在論をウィトゲンシュタインが批判する脈絡で、古い覚え書きが活用されているのである。

だがしかしこのことは割り注として引用された覚え書きの主張がそのままの形で維持されることを含意するであろうか。私はそうは思わない。「検証 (Verification)」という語が『探究』ではこ

箇所ではしか登場しないのである。<sup>⑩</sup>

さらに、「兆候」は『探究』ではここの箇所のみ登場する。これでは基準と兆候の関係を主題的に論じている、とはとても言えないであろう。割り注として古い覚え書きが紛れ込んだと考えるべきである。<sup>⑪</sup>

## 五 例題2。「感覚日記」(二五八節)はいかに読まれるべきか。

『探究』の見通しの効かない論述を読み解く一つのつは、省略できる部分は省略して読むことである、と私は考える。例えば、中間版『探究』を再構成するつもりで中間版に含まれない覚え書きを飛ばして読むことである。ウィトゲンシュタインの私的言語論の中心テーマの一つである感覚日記についてもこのことはあてはまる。

「感覚日記」は『哲学探究』では二五八節で導入されている。訳出してみると

次のような事例を思い浮かべよう。私は、或る感覚の繰り返しを日記に記したい。そのために、感覚と記号「E」を連合し、その感覚を持った日毎にこの記号を日記に書き記す。――私が先ず指摘したいのは、その記号の定義を述べることができないことだ。

――だが、私は自分自身に対してそれでもある種の直示的定義を与えることが出来るのだ。――どうやって。私は感覚を指し示すことが可能というのか。――普通の意味では不可能だ。しかし私

はその記号を口にし、書き記す、そしてその折に私の注意をその感覚に集中する、——それ故いわば内的にそれを指し示すのだ。

——だがこの儀式は何の為なのか。こんな言い方をするのもそれが儀式にしか見えないからだ。定義というものは記号の意味を固定するために役に立つもののはずだから。——うん、だがそのことはまさに注意の集中によってなされているのだ。——というのも、注意の集中によって私は感覚と記号の結合を私の心に刻み込むのだ。——だが、「私はそれを私の心に刻み込む」とは、この過程が私が将来この結合を $\wedge$ 正しく $\vee$ 思い起こす結果をもたらすということしか意味し得ない。しかし我々の事例では私は正しさの基準などもっていないのだ。ここで人は次のように言いたい、ともかく、私に正しいと思われることが正しいのだ、と。そしてこれがいわんとすることは、ここでは「正しさ」の話ができない、ということだけだ。

この一節はこれまで大別して対立する二つの解釈をうけてきた。一つの解釈によれば、ワイトゲンシュタインはここで感覚日記の不可能性を主張しており、それ故私的言語の不可能性を完璧に主張していることになる。もう一つの解釈によれば、感覚日記をつけることの不可能性を論じるこの議論はとても納得のいくものではなく、それ故ワイトゲンシュタインの意図に反することになるが、私的言語は全く不可能というわけでもない、ということになる。

私の解釈では、二つの解釈ともこの節のポイントをとらえ損なっている。即ち、ワイトゲンシュタインは二五八節で感覚日記の不可

可能性を主張したのでもなく私的言語の（部分的）可能性を主張したわけでもない。

まず第一に、私自身の経験に照らしてみても「感覚日記」をつけることは十分ある話である。以下は私の実際の経験である。

私の視野にジグザグの波型が現れることがある。片目をつぶっても消えないので視神経のどこかに問題があると考えられる。波型は揺れ始めだんだん大きくなる。私は不安で立ち上がれないし、ものを注視しようにも波型の揺れが邪魔になる。足元に視線を向け、何も見つめようとせずじっと座っていると約十五分のうちに波型は次第に小さくなり右上に退き、やがて消えてしまう。その後約十分後に日常生活に戻っても問題はなかった。

一度目の時には正直びっくりした。二度目からはそれほどないが、勿論うれしい経験ではない。これが何の病気の症状なのか、内科医がどの様に診断するか、私は今のところ知らない。いままで医師に話していないのは一つには面倒であり、また家族に心配をかけたくなかったからである。（実際、この話を最近聞かされて家人は少々吃驚した。）しかし、これまでももしその「発作」を記録すればできたことは確かだし、今後医師に命じられれば、「x月x日、E」と記録可能である。そして、私の記録を見ながら医師が「発作が頻繁になっていますね」と私に告げるかもしれないのである。

この私の報告が尤もな話として受け入れられる限り、感覚日記は可能であり、かつ、それは言語ゲームの中で位置を占めている。そ



して、注意すべきことにこの話が読者に理解でき、医師が私の日記を利用できるからには、感覚日記は私的言語論の意味で私的ではない。それ故上述の解釈は二つながらにポイントを外しているのである。

それでは、二五八節のポイントはどこにあるか。私の解釈では、他人には理解できない形で私的な定義、同定、基準の設定、が可能である、という主張への反論でありそれ以上でも以下でもない。

ワイトゲンシュタインと彼の「仮想敵」との対話の形をとって進行する論述の論点を整理すれば次のようになる。

#### 相手方の論点

- (a) 感覚日記をつけることが可能である。これは感覚と記号との連合による。
- (b) 自分に対してこの記号の直示的定義が可能である。
- (c) 記号を話し書く折の内的な、注意の集中が直示的定義を可能にする。
- (d) 注意の集中が感覚と記号の結合を私の心に刻印する。  
これに対しワイトゲンシュタインの論点は
- (e) この記号の定義を述べることが出来ない。
- (f) 感覚を指し示すことは不可能である。
- (g) この「内的集中」なるものは単なる儀式であり、記号の意味を定める定義ではない。
- (h) 「心への刻印」なる説明方式は、高々因果的説明にすぎず、しかも現在の事例では正しさの基準が与えられていない。

というものである。

ワイトゲンシュタインの相手方は、感覚日記をつけることが我々に可能だ、というもつともな前提から出発し、感覚日記に登場する（少なくとも一部の）記号は、自分自身に対する内的な直示的定義によってその意味が定まり、内的な集中とそれによる心への連合の刻印がその記号の正しい使用をそれ以後保証する、と主張することによって、「他人は理解できず私のみが理解可能な」私的言語の可能性を擁護しているのである。これに対してワイトゲンシュタインは、このような内的な、注意の集中により私にのみ（少なくとも私には）通用する直示的定義が与えられる、というのは哲学的な思いこみがもたらす儀式であり、それ故その記号が定義に基づき正しく使用されていることをなんら保証するものではない、と反論しているのである。

ワイトゲンシュタインの反論について注意すべきことは、「私的で内的な注意の集中による記号「E」の直示的定義がそれ以後の基準を与える」という論点の批判であって、定義を述べることが出来ない故に記号「E」の使用は不当である、とは論じておらず、感覚日記は幻想であり儀式にすぎない、とも論じていないことである。即ち、ここでワイトゲンシュタインは感覚日記の可能性を否定してもしなければ、全ての記号に定義を与えるべきである、と主張してもしないのである。

それにしても二五八節のワイトゲンシュタインの議論は、いわば嵩にかかった高飛車な議論だ、という印象を与えるかもしれない。

この印象はある点では正当である。何故なら、二五八節は中間版『探究』では二五六節とあわせて一つの節となっているからである。二五六節では、感覚がその自然な表出と結びついている限りそれは私的でない、というウィトゲンシュタイン側の主張に対して、相手方は、自然な表出をせず、感覚のみを持ち、その感覚と名とを連合すればどうか、と問題を提起し、そしてその具体例として感覚日記が提案されてくるのである。重慶戦に持ち込んでいるのは私的言語の擁護者の方である。そして、ウィトゲンシュタインはやや居丈高にこう述べることになる。「一方では君達は、他の領域との連関を断ち切った。他方、「E」を繰り返す。この繰り返し、同じ記号の使用が一体何だというのだ」と。最終版『論考』では二五七節が介在するために、この脈絡の見通しが悪くなっているのである。

それではウィトゲンシュタインからすれば、同じ「E」の繰り返しはどのような考えられるのか。まず、「感覚の正しい再認」なる概念がいかがわしい。第二にそれが感覚であれば他の事柄との有機的連関のうちにある。二七〇節はこのことの確認である。即ち

さて、私の日記の記号「E」の記入の活用を想像しよう。私は次のような経験をする。即ち、ある特定の感覚を持つとき、いつも私の血圧が上がっていることを血圧計が示す。そこで、私は自分の血圧の上昇を器械の助けなしに述べることができるようになる。これは結構な成果である。さてここで、私がその感覚を正しく再認したかそうでないかは、全くどうでも良いように思われるのだ。私が同定に際して絶えず思い違いをすると想定しても、全

く構わない。そしてこのことが既に、ここで誤謬を想定することが単なる見かけにすぎないことを示している。（いわば、我々はボタンと見えるものを回すことによって機械のある状態にもたらしことができるかのようにみえるが、しかしそれはメカニズムとは全く結合していない単なる飾りにすぎなかったのである。）そしてこの場合、「E」を感覚の名と呼ぶどんな理由があるだろうか。おそらく、この記号がこの言語ゲームで用いられる用いられ方であろう。―そして何故「特定の感覚」、従ってその都度同じ感覚なのだろうか。そう、我々はその都度「E」と書くこと想定しているのである。

なお、MS一二九、四七では最後の一文が「私がその都度この同じ記号を使用する、というのが唯一の理由である。」となっており、さらにMS一二四、二八二(3)―二八三(1)では、二七〇節のより分かりやすいヴァージョンが見いだされる。即ち

君が痛みを感じ、そのことから高血圧を推論するとき、君は君の高血圧を「無」から推論した、とは言いたくないであろう。

そして、君が自分の血圧を観察し、それが君の痛みの状態にいかにか依存しているかを認める、という実験はいかに観察されうるのか。君は外的手段で痛みを引き起こすのではなく、痛みの（自然な）経過と血圧の経過とを比較するだけである。人が痛みを持つときに日記に記号を記入するのではなく、そのような実験を行う、と想像しよう。これは実験ではないのか。彼が痛みの表現を持つことによつてのみ、それは実験となるのか。彼は血圧の「変化」

を正しく、誰にもわかる形で、予言できるのではないのか。

そしてここでもまた、彼の内的感覚の「正しい」再認は何の役割も演じない。というのも、彼が感覚を再認すると「思う」ので十分である、何故なら我々の関心は血圧の「正しい」予言だからである。——それ故、彼は感覚を正しく再認すると「思う」、と語るのも、誤りに違いない。

それでは、私秘的でない自家用としての感覚日記を私が記すとき、「E」を繰り返し使用することをどう理解すべきであろうか。ここでも五八〇節（「内的過程」は外的基準を必要とする。）を手がかりとして、「感覚は内的過程であるが、これについては行動主義的定義しかありえない」と解するのは、典型的な誤りである。周知のようにこの解釈は次の二節と大きく抵触するからである。

「私が「私は痛みを持つ」と言う時、いずれにせよ私は自分自身に対しては正当化されている。」——これはどういうことか。

「他人がもし私が何を「痛み」と名付けているのかを知ることができたなら、彼は私とその語を正しく使用していることを承認するであろうに」ということか。

ある語を正当化なしに使用する、ということとは、それを不当に使用する、ということではない。（二八九節）

私はもとより私の感覚を基準によって同定するのではない。私は同じ表現を使用するのである。しかしこのことで言語ゲームが終わりとなるのではなく、これで言語ゲームが始まるのである。…

## （二九〇節）

それ故、次に五八〇節をとりあげねばならない。

### 六 例題3。「内的過程」（五八〇節）のパラダイムは何か。

「内的過程」は外的基準を必要とする。

という簡潔な一節が『探究』のウィトゲンシュタインを行動主義者と解釈する為の大きな手がかりとなってきたことは周知である。しかし解釈にあたってまず第一に留意すべきことは、ウィトゲンシュタインが「内的過程 inner Vorgang」ということで何を念頭においていたか、あるいはこの語の彼の用法がどの程度イデオシンクラティックであるか、である。

私の予想を述べれば、五八〇節が妥当するような文脈で想定される「内的過程」は、信じる、思い出す、といった事柄であり、痛みのような感覚質、明るい青空の私に対する見え、砲撃の私に対する聞こえ、といった類のことでは決してない、ということにある。

まず第一に「内的過程」という表現は、『探究』第一部ではこれ以外には三〇五節にしか見いだせない。三〇五節は一九三七—三八年に書かれたと推定されるMS一一六、二五二に由来し、現在公刊されている覚え書きに見出される表現では最も古い。これ以外の箇所は全て『探究』第一部脱稿以後の遅い時期の覚え書きに属している。これらの覚え書きを検討して私の予想を検証すべきであるが、今回は割愛せざるを得ない。大方の吟味を請う次第である。<sup>①</sup>

もう一つの間接的な方法は五八〇節の覚え書きが書かれた時期に  
ワイトゲンシュタインが何に集中していたかを調べ、それに基づき  
推測することである。

モーリーによるならば、五八〇節はMS一三〇、一八に由来する。  
さしあたり彼のリストによりMS一三〇より『探究』第一部に収録  
された覚え書きを表にすれば次のようになる。

MS一三〇	『探究』第一部
一	五八九
二	六〇六
五	五九四 a b
九	三二五
一五	二六九
一八	五八〇
一八	六七八
一九	五九〇
二三	三三〇
三三	三〇一

扱われているのは、決心、信じること、表情、意味をこめた表現、  
確実性、信頼、理解、つもり、考える、表象、といったことからで  
ある。

本来ならば、MS一三〇を詳細に検討すべきであるが、とりあえ

ずの中間報告として述べておくことにする。

#### 七 例題4。いわゆるワイトゲンシュタインのパラド ックスとは何か。クリプキのワイトゲンシュタイ ン解釈は妥当か。

いわゆるワイトゲンシュタインのパラドックスは、周知のように  
クリプキの「命名」ないし発見である。即ち、「我々のパラドク  
スは次のようなものであった」という文で始まる二〇一節に由来す  
る。だが、この過去形を含む表現はいつい何に「前文照応」して  
いるのだろうか。

クリプキは『探究』一八五節以下の「+2」に対する生徒の奇妙  
な反応にヒントを得て、プラス対クウスという卓抜なモデルを作り  
上げた。しかも彼は、二〇二節の

それ故「規則に従う」ことは一つのプラクシスである。そして規  
則に従うと「信じる」ことは、規則に従う、ことではない。そし  
てそれ故に、人は規則に「私的に」従うことはできない。さもな  
ければ、規則に従うと信じることに規則に従うことが同じこと  
になるであろうから。

という記述と、二五八節の末尾の

……ここで人は次のように言いたい、ともかく、私に正しいと思わ  
れることが正しいのだ、と。そしてこれがいわんとすることは、  
ここでは「正しさ」の話ができない、ということだけだ。

という記述の形式的な同一性、及び二〇二節が二五八節に先立つということから、彼の大胆な解釈、即ち

『探究』二四三―三二五節にかけての、後期ワイトゲンシュタインの私的言語論と一般に呼び慣わされている部分の考察は、独自の考察というよりもむしろ言語に関する彼の一般的考察の系である。

を導き出している。

だがこのクリプキの解釈が文献学的に支持し得ないものであることはハッカー達を初めとして既に指摘されてきたことである。

まず第一に指摘すべきことは、二〇一―二〇三節が比較的遅くに書かれた覚え書きであることである。それらは私の見た限りMS一二四にも見いだされず、MS一二九に登場するが中間版『探究』に採用されることもなく、TS二二八を経由して最終版に収められたものである。それらのソースリストを作ってみれば以下のようになる。

MS 一二九	TS 二二八	MS 一二四
一一四 (一) 『断片』		三〇三
(二) 『探究』	二五八	五〇六
(三) 『探究』	二五九	二八四
一一五 (一) 『探究』		二八二
(二) 『断片』		六二〇
(三) 『探究』		三七七

一一六 (一) 『探究』 三八四

一一七

一二八 (一)

(二) 『探究』 三八〇

(三) 『探究』 三七八 二六三

一二九 (一)

(二) 『探究』 三七九 二六四

(三) 『探究』 二〇一 二六五

一二〇

一二一 (一) 『探究』 二〇二 二六六

(二) 『探究』 二〇三 二六七

即ち、『探究』では三七七―八〇節となっている考察に引き続いて記されているのである。

ベイカーとハッカーは「我々のパラドックス」は『探究』一九八節をうけている、と解釈する。確かにこのように解して『探究』を自然な流れで読むことが可能である。他方、一九八節が『探究』においては、『数学の基礎』第一部を構成する覚え書きからの抜粋である数節に直接引き続く位置に配置された覚え書きであることを考えれば、この節の由来についてなお考察を試みたいと考える。<sup>15)</sup> なお、私としては代案として二〇一節を三八〇節にかけて読むことがどれほど可能であるか、一考してみたい。

しかし何れにせよ、より以前のヴァージョンに戻ってみればクリ

プキの主張が根拠のないものであることは明かである。

## 八 『哲学探究』はどの程度パッチワークであるか。

この間についての確たる解答を現在の私は持ち合わせていない。  
『探究』を貫く統一的視座、『探究』が扱った大文字の問題について云々する前に、個々の覚え書きについて丁寧に考えてみるべき多くの問題がある、と思っている。その結果、たとえ『探究』が一つの壮大なパッチワークに他ならないことが明かとなったとしても、それはそれで一向に差し支えないと思う。この小論は、『探究』の一つの読み方の提案とともに、『探究』全体の解釈の方向について一つの問題提起を行ったものにすぎないのである。

### 注

#### (1)

以上の概括はある程度の誇張を含んでいる。哲学研究の領域が完全にプログラム化され、初心者もベテランも同じ努力で同じ結論に到達する、ということはないであろう。さらに、ワイトゲンシュタインの著作のことがくが永年の研鑽を要求するわけでもない。例えば、『論理哲学論考』の脱稿に至る一九一〇年代の数年間の研究は、それだけとしてより後のものから孤立して進めることが一応可能である。(即ち、前期ワイトゲンシュタインのみを研究することが可能である。)あるいは、中期以後の遺稿であっても短期間の覚え書きを整理したもの、例えばTS二〇九(即ち、『哲学的考察』)のような場合は、比較的扱いが容易である。こ

れと対比的に、長い時期にわたる覚え書きが、幾重にも堆積している『哲学探究』は扱いにくい著作である、と私は主張しているのである。

(2) これらについては、さしあたり 奥雅博「遺稿研究の現状」(飯田隆編『ワイトゲンシュタイン読本』法政大学出版局、三一一五ページ)を参照されたい。

(3) G.Hallett, *A Companion to Wittgenstein's "Philosophical Investigations"*, Cornell U.P. (ただし、英訳のみが与えられている)

(4) Baker & Hacker, *An Analytic Commentary on the Philosophical Investigations*, Blackwell. (現在三巻、四二七節まで。なお、第三巻はハッカーの単著である。)

(5) S.S.Hilmy *The Later Wittgenstein*, Blackwell.

(6) A.Maury, *Sources of the Remarks in Wittgenstein's Philosophical Investigations*, *Synthese*, 98, 349-378, 1994.

(7) G.H.von Wright, *The Origin and Composition of the Philosophical Investigations*, in his *Wittgenstein*, Blackwell, pp.111-136.

(8) ライト論文を私自身が整理した目録は関心のある方々に配布する用意がある。なお、極く簡潔な要約が、『ワイトゲンシュタイン読本』の「ワイトゲンシュタインの遺稿」の訳者注1と5に与えられている。

(9) さらに、三四九―三五二節も、やはり注なのである。

(10) なお、「検証可能verifizierbar」は二七二節に「検証するverifizieren」は第二部二二二ページに、それぞれ一回のみ登場する。

(11) なお、先の引用文の中の「定義」「コンヴェンション」という表現は、社会的コンヴェンションを思わせる点でミスリーディングであると考える。さらに、基準と定義を重ね合わせる形で『探究』に登場する「基準」を読み通すことは不可能と思われる。これら

については、別に論じたい。

- (12) 私は一九九五年一月二十九日に京都科学哲学コロキアムの例会でこの報告を行ってみた。

- (13) 二七〇節は中間版『探究』では二五八、二六〇、二六一、二七〇と続く論述である。

- (14) データベースの検索等により『探究』第一部以外に「内的過程」が登場する箇所を列挙すれば次の通りである。

『探究』第二部一八一ページ『心理学の哲学』第一部三〇二、『断片』三六九『心理学の哲学』第一部六〇四、『心理学の哲学』第一部六五六、『心理学の哲学』第一部六五九、『心理学の哲学』第一部八四七、『断片』九〇『心理学の哲学』第二部二三六、『断片』一九二『心理学の哲学』第二部五九八、『心理学の哲学』第二部六四三、『心理学の哲学』第二部六四四、『断片』四六九『心理学の哲学』第二部一五、『断片』六四九、『最終草稿1』一二〇、『確実性』三八、『最終草稿1』二五三、『断片』一三六、『断片』三四〇『心理学の哲学』第一部六〇七、『心理学の哲学』第一部三〇五、『最終草稿2』二二一三、『最終草稿2』三三。

もとより以上は公刊された遺稿に限った話であり、未公刊資料にあたりと異なった結果がでてくる可能性は予め否定できない。

- (15) ハッカー達は一九八節がMS一八〇Aの冒頭にくる覚え書きであることを指摘している。この覚え書きのMS一二四、MS一二九における脈絡、他方、二〇一節となる覚え書きのMS一八〇Aその他の脈絡について、なお検討してみたいと考えている。

## **To What Extent is Wittgenstein's *Philosophical Investigations* a Patchwork? — Proposal of a Research Programme.**

Masahiro OKU

Wittgenstein's *Philosophical Investigations* is notoriously difficult to comprehend. Although each passage is clearly written, the gist of series of those is often slipperly and tend to arouse incompatible interpretations. In my opinion, this is mainly due to its origin and composition. The book is nothing but the precipitate of his long-term investigations. In result, very old remarks are sometimes used as a comment without any modifications, remarks are several times cut and pasted, and catch phrases are alone picked out and placed into different contexts.

I propose a suggestive tactics of interpretation of the book: in case of difficulty, return to earlier versions of the remarks in issue. By using this tactics, I tried to propose my interpretation of four sections, 354, 258, 580, 201.

### **Key Words**

Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, Nachlass, philology, patchwork